

11 月度土曜例会

2018 年 11 月 17 日

ゲスト：Mr. Yann Becker (Switzerland)

テーマ："Shadow of a Dream. A Swiss Photographer in Japan"

自己紹介と経歴

1971 年ローザンヌ生まれ。

ローザンヌ大学、パリ第 10 大学で文学を学び、チューリッヒやジュネーヴで舞台や照明デザイン、写真を学ぶ。

仏文学や映画を通して、物事に対する自分のイメージ作りが醸成され、写真に対する姿勢が決まっていたように思う。

母国語はフランス語であり、英語はあまり得意ではない。

特に発音が異なっており、むしろ日本語とフランス語の発音の類似性が自分には心地よい。



言葉 (Language)

人間にとって非常に大切なものである。

社会、アイデンティティ、人間関係を築く上での共通イメージを得ることが出来る。

写真家として、写真をソーシャルネットワークで発信する時は英語で解説する。

Artistic Language においては、舞台美術、照明、ビデオデザイン (映像制作) の 3 要素が大切であると思っており、これらが一体となって Photo Theater を作り上げる。

写真では同じものを撮っても、人によって異なる物語がある。

舞台美術 (Scenography)

<skene>stage+<graphein>writing = writing on stage

舞台では照明が大きな役割を担う。

舞台の上でイメージをつくり上げること。

Stage Designer の役割は舞台で小世界をつくり上げることである。

(World Maker)

写真 (Photography)

<photo>light+<graphein>writing = writing with light

写真は、対象物の光の反射を感知して描き出すものである。

写真の撮り方には、光が重要な要素を占める。

紅葉を撮る時には、光の角度や良い光を選び写真を撮るでしょう。

書道 (Calligraphy) ; calli=beauty 美を描く。

振付 (Choreography) ; choreo=movement 動きを描く

映画製作 (Cinematography) ; cinemato=movement

地理学 (Geography) ; geo=land 土地を描く。

自分を振り返って

7歳の頃に、日本のアニメに興味を持ち、マジンガーZが好きで、自分自身のスペースシャトルを作製した。(Little Worldの作製)

10代には、本をよく読み作家になりたいと思ったり、映画を見て映画監督になりたいと思った。

最終的に、Stage Designerの道に辿りついた。

現在までに、20年以上に亘って、150位のStage Designerの仕事を行って、World Makerとして生きてきたと思う。

ここから写真を通して

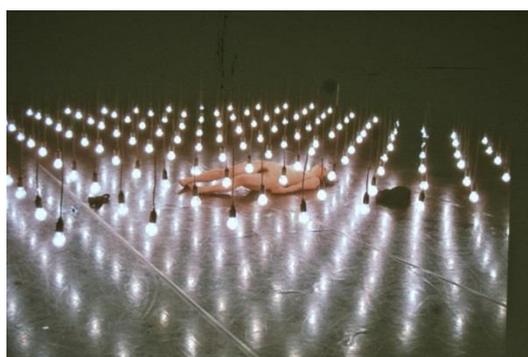
東京の会社から依頼されて照明デザインの仕事をを行ったもの。

2-3年前の日本やインドネシアの写真。

舞台美術 (Scenography)

144個の電球を使い、明るさが暗闇から明るくなっていき、踊る空間も狭まっていく中で、繰り広げられるダンサーの29分のパフォーマンスを描いた。

観客は取り囲んで周りから見るというもので、時間と人間の生涯を描きたかった作品。



小劇場で小さなマンションの一室をイメージして演出した作品。

金箔と赤の壁を使った小世界で
繰り広げられる物語を描いた舞台美術。



家具を使った小さくて、シンプルな作品。

20年前のオフィスをイメージして、
800個のアーカイブ・ボックスの前の
ボスとその部下の女性を描いた作品。



青い空をイメージした舞台の上に
旅を象徴する旅行鞆を置き、マナ、カ
ナ姉妹が演じる様子を1/4の円弧のスク
リーン2枚の裏側から光を当てて、
様々な環境を演出した作品。

3人の全裸の演者が閉じ込められた空
間で地獄を演じるのを、観客が周りから
立ったまま眺めるという演出の作品。





ストラビンスキーのオペラを描いた作品では、シャガールの絵を三次元世界で使って空想的な世界を演出した。ヨーロッパ世界では生活に密着している牛を意識的に使った。

何が面白かという、私にとっては、禅のミニマイズされた simple な世界は非常に興味深い。

写真 (Photography) ; 世界のイメージを描く

昔の粗い画素が好きである。

車や列車の動きを撮る。

建物と赤い空

アーパマーケットやガソリンスタンド

街灯の写真 (霧深い駐車場)

これらは、すべて場所の下見 (location scouting) と考えている。



将来、映画をつくる時のための準備と考えている。

ドイツと香港の映画監督の作品が気に入っており、それらを意識している。

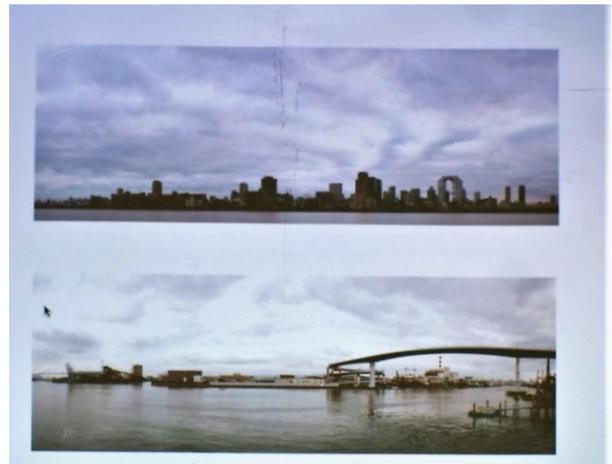
スイスでは Foggy Parking という展覧会を開催したものです。

これは、日本で撮った霧深い駐車場の光が上から下にあたっている情景をイメージして、車の目線で捉えることを意識しました。



日本での写真

梅田のオフィス街の写真と大正区の工場のパノラマ写真。
都市の上部構造と下部構造を示した。
これは8枚の写真を撮って、繋ぎ合せてパノラマとしたものである。



ハルカスからの写真を撮って、
Pixel(picture cell)を横に長い線に引き伸ばし、世界の裏にあるものや下にあるものを把握しようと意図した。

青い空と白い雲の写真を撮って、Pixelを横に伸ばしたイメージ写真を作製して抽象的な世界を創出した。

水に移った風景を upside-down で描き出して、異なる見方での世界を描いてみた。

(報告者注；おそらく、表層にあるものの下側に物事の本質があるという彼の考え方を表現したものと思います)



断片；人生の交差点 (Fragment-crossroad-Life)

ローザンヌで日本の映画（小津安二郎、溝口健二、黒沢明、大島渚、吉田喜重、今村正平ら）をみて、日本という国に親近感を持った。

山頭火の「真っ直ぐな道で淋しい」という言葉に惹かれ、自分も寄り道をしてみようと考えて、新しい世界で人の写真を撮ってみたいと考えた。

8年前に来日し、天下茶屋に居住している。

日本に来て、天下茶屋という労働者の町であり、古く、裕福ではない下町に住

んでみて、多くのヨーロッパ人が語る日本人の引っ込み思案で閉鎖的な日本とは異なる開けっぴろげな日本もあることを知った。

大阪の下町で人と出会い、ふれあい、飲み屋で一緒に飲み、人間性に触れることが出来た。

天下茶屋の写真

高島屋のマークの入った質屋の看板、潰れた美容室、廃業した喫茶店には、そこに記憶が刻まれており、多くの物語を語りかけてる。



いくつかの写真を示しながら、そこに刻まれた記憶を語られました。

I さんという 70 歳を超えた酒屋のオーナーの店には、不思議な空間で、多くの常連さんが通っており、友達付き合いをしてくれる。

まっちゃんという小さな老婆さんは、記憶が定かでないにもかかわらず、顔を覚えてくれて、いつも優しく接してくれる。

O さんと大きな時計の前で、最初に会ったのが 5:00 だった。

昔、フランス語を学んだという 85 歳を過ぎた人が彼のフランス語の文章を美しい日本語に訳したものを紹介。(最後に示します。)

人類学的なアプローチで日本を調べてみたい。

Short Stories

井上靖の短編は登場人物 1 人が多く、美しい敗者の物語が多い。

北海道から来たという、人は殆ど所持品の無い部屋で暮らし、20 年以上前のフィルムを大切に持ち、写真を撮り続けている。



10日ごと位に劇場を転々とするストリッパーの写真。

Iさんという結婚や仕事に失敗し、友達に借金を踏み倒されて、ヘンリー・ミラーの版画（ポスターを切り取って作ったもの）を持っている平凡な男。



30,000人が住んでいると言われる釜ヶ崎（あいりん地区と呼ばれている）に3年前から通って写真を撮っている。

ここには、大阪だけではなく、日本中から流れてきた人たちが身を寄せ合って生きている。（報告者注；彼の言う beautiful loser）

何枚かの写真を示しながら、彼の言う美しき敗者の姿を語られました。

自動販売機の前で将棋に興じる人たち。

沖縄から来た社長と呼ばれる男。

昨年亡くなったIさんという刺青を彫った40年間ヤクザをやって刑務所への入退所を6回繰り返した男。

60歳の男と80歳の女のファニー・カップル。

Iさんが紹介してくれたドヤ街に住み「不惜身命」の刺青を彫った若い男。

女装した男。

シェルターの列に並んでクーポンを待つ行列。



Shadow of a Dream という表題については十分お話しできませんでした。

来年度の展示会の予定；

「Outsider Portraits」, Gallery Koto, Kyoto, March 28th to April 9th

「Notes from the Islands」, Awajishima Westin Hotel, all August

「Factory Sketches」, Gallery Kaze, Osaka, second half of August

質疑から；

刺青について；日本の一つの伝統であり、特別な物語を語るものであり、写真のように美しいと感じた。

日本の映画；小津らの日本映画の印象は、内省的な小説のようであり、美しく、taste of life and Japan と感じる。

私は、Japanese mentality や Japanese way of life をもっと学びたい思っている。

私は、いつまでも学ぶ人でありたいと考えている。

天下茶屋の項での述べられた彼のメッセージ

« Les visages sont creusés par le temps, les corps sont vacillants, les voix éraillées. Beaucoup vivent seuls, presque sans argent. Ils sont les oubliés de la société moderne, mais ils sont aussi la mémoire du quartier, la mémoire d'un Japon en train de disparaître. Je découvre une profondeur, une humanité que je n'avais pas imaginée à ce point généreuse et malicieuse. Ils me parlent de leur passé. Les souvenirs, les moments drôles ou tragiques font briller leurs yeux. »

「やがて表情がもうろうとなり体はよろけ声はかすれてくる。多くの人は孤独でお金もない。

現代社会から忘れられた存在である。

しかし彼らはまたその地域の象徴であり薄れていく日本の象徴である。

思いも寄らない気の良さや滑稽な人情と深い人間性を見ることができる。

彼らは自分たちの過去のことを話してくれる。

滑稽で悲しい追憶のとき彼らの目がキラツと光る。」